



TITLE:

Oncologic and sensory functional outcomes of cervical nerve preservation in neck dissection for head and neck cancer(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

Honda, Keigo

CITATION:

Honda, Keigo. Oncologic and sensory functional outcomes of cervical nerve preservation in neck dissection for head and neck cancer. 京都大学, 2019, 博士(医学)

ISSUE DATE:

2019-05-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r13258>

RIGHT:

This is the accepted version of the following article:Oncologic safety of cervical nerve preservation in neck dissection for head and neck cancer, which has been published in final form at [https://onlinelibrary.wiley.com/doi/abs/10.1002/hed.24826]. This article may be used for non-commercial purposes in accordance with the Wiley Self-Archiving Policy [https://authorservices.wiley.com/author-resources/Journal-Authors/licensing-open-access/open-access/self-archiving.html]. The Version of Record of this manuscript has been published and available in <Acta Otolaryngologica><2018/04/14><http://tandfonline/><DOI:10.1080/00016489.2018.1455008>

京都大学	博士（医学）	氏 名	本多 啓吾
論文題目	Oncologic and sensory functional outcomes of cervical nerve preservation in neck dissection for head and neck cancer (頭頸部癌に対する頸部郭清術における頸神経温存の腫瘍学的および知覚機能的結果)		
(論文内容の要旨)			
<p>頭頸部癌に対する頸部郭清術では、通常、広頸筋直下で広く皮膚を剥離する（広頸筋下アプローチ）ため、知覚神経である頸神経の皮膚末梢枝が切断される。さらに、郭清の一塊性を保ち根治性を高めるために頸神経本幹も切除されることが多いため、術後の頸部知覚麻痺は永続的で、患者の生活の質を低下させる一因となっている。頸部知覚を温存するためには頸神経の本幹だけでなく末梢枝に至るまでの機能的温存が必要である。しかし、これまで、頸神経温存の腫瘍学的安全性は示されておらず、知覚機能予後に優れた温存法（術式）も報告されていなかった。</p> <p>そこで、症例を選択すれば頸神経温存が腫瘍学的に安全であること、皮膚終末枝の温存が可能な新規術式（胸鎖乳突筋下アプローチ）を用いることで術後の知覚温存率が向上することの 2 点を示す目的に後方視的研究を行った。</p> <p>まず、2009 年から 2014 年に頸部郭清術を行った頭頸部癌症例 222 例（335 郭清側）を対象として腫瘍学的安全性の検証を行った。頸神経温存率は全体で 52%（175/335 側）であり、予防的郭清側に限れば 80%（114/142 側）、治療的郭清側に限れば 32%（61/193 側）であった。Kaplan-Meier 法を用いた 5 年粗生存率は 71%、病期別 5 年無病生存率は 0-I 期で 100%、II 期で 89%、III 期で 78%、IV 期で 59%と良好であった。5 年頸部制御率は頸神経温存側で 95%、切除側で 89%であった。</p> <p>次に、2012 年以降の 87 症例（129 郭清側）を対象に頸部知覚予後に関する検討を行った。耳垂（大耳介神経支配領域）、顎下部（頸横神経支配領域）、側頸部（鎖骨上神経上半支配領域）、鎖骨下部（鎖骨上神経下半支配領域）の 4 領域について、術後 1 週間以内に細径の綿棒を用いて皮膚触覚の有無を評価した。術後の頸部知覚温存率について、頸神経本幹を温存した場合と切除した場合の比較、さらに、頸神経本幹を温存する際に通常の広頸筋下アプローチを用いた場合と胸鎖乳突筋下アプローチを用いた場合の比較を行った。知覚温存率は、頸神経本幹温存側（86 側）では耳垂/顎下部/側頸部/鎖骨下部の順に 75.6/20.9/74.4/86.0%、切除側（43 側）では 37.2/2.3/2.3/4.7%と 4 領域すべてで頸神経本幹温存側が有意に良好であった。頸神経本幹温存側に限ると、胸鎖乳突筋下アプローチ採用側(54 側)では知覚温存率が順に 81.5/27.8/92.6/94.4%であったのに対し、広頸筋下アプローチ採用側(32 側)では 65.6/9.4/43.8/71.9%であり、顎下部、側頸部、鎖骨下の 3 領域において胸鎖乳突筋下アプローチで有意に良好であった。</p> <p>本検討結果では、頸部郭清術の 52%で頸神経を温存しつつも生存率、頸部制御率ともに良好に保たれており、症例を適切に選択すれば頸部郭清における頸神経温存は腫瘍学的に安全であることが示された。また、頸神経温存の適応範囲には神経温存操作の際の腫瘍播種の危険が小さい予防的頸部郭清側および、</p>			

<p>一部の治療郭清側が含まれることが示唆された。また、頸神経本幹の温存が術後の頸部知覚保持に不可欠であるという基本事項が明示されると同時に、胸鎖乳突筋下アプローチを用いることで、術直後から効果的に頸部知覚を温存できることが示された。頸部郭清における頸神経温存は、頭頸部癌治療の侵襲軽減に有用であり、今後、より多くの症例を蓄積し、長期観察を行うことで詳細な適応範囲とさらに効果的な知覚温存法を明らかにすることができると考えている。</p> <p>(論文審査の結果の要旨)</p> <p>頭頸部癌に対する頸部郭清術では、頸神経障害による永続的な頸部知覚麻痺が生じることが多いが、これまで頸神経温存の腫瘍学的安全性は未検証で、知覚機能的結果に優れた頸神経温存法も未確立であった。本研究では、頸神経温存の腫瘍学的安全性を示し、知覚温存効果に優れた術式を確立するための臨床的検討を行った。</p> <p>まず、頭頸部癌症例 222 例に施行した 335 側の頸部郭清術を対象として腫瘍学的安全性の検討を行った。全体では 52%（175/335 側）、予防的郭清側に限れば 80%（114/142 側）の頸部側で頸神経温存がされていた。5 年無病生存率は 0-I 期 100%、II 期 89%、III 期 78%、IV 期 59%と良好であった。頸神経温存による 5 年頸部制御率は頸神経温存側 95%、切除側 89%であった。</p> <p>次に、87 例に施行した 129 側の頸部郭清術を対象として知覚機能的検討を行った。耳垂、顎下部、側頸部、鎖骨下部の 4 領域の術後皮膚知覚と、頸神経の処遇および術式との相関を検討した。胸鎖乳突筋下アプローチを用いた頸神経温存によって、顎下部、側頸部、鎖骨下領域で知覚温存率が向上することが示された。</p> <p>本研究では、頸部郭清術における頸神経温存の腫瘍学的安全性が示された。また、胸鎖乳突筋下アプローチを用いた頸神経温存により良好な知覚機能的結果が得られることが示された。</p> <p>以上の研究は、安全かつ機能的な頸神経温存が可能な、新しい頸部郭清術式の確立に貢献し頭頸部癌治療の低侵襲化に寄与するところが多い。</p> <p>したがって、本論文は博士（医学）の学位論文として価値あるものと認める。なお、本学位授与申請者は、平成 31 年 3 月 13 日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。</p>			
要旨公開可能日： 年 月 日 以降			